途上国支援の現状と課題および本事業への期待 ：NGO の立場から

（幼い難民を考える会事務局長 峯村里香）

◇JNNE

・NGO はそれぞれの分野でネットワークがある。教育協力に関しては、2001 年にネットワーク、略称で JNNE ができた。これは、NGO を中心として、海外で国際協力を行う関係機関を含めたネットワーク。

・NGO 自身の強化をネットワークの中で行っていくことと、政府や国際機関に対して、これまでの経験から政策提言など積極的に行っていくこと、セミナーやシンポジウムや研修などを通じて一般社会に教育協力の理解を訴えていきたいというようなこと、を目的としている。

・資料に具体的な活動内容を記した。例えば 2 番目「調査研究」では、毎年テーマを決めて、昨年は公的な教育、今年はインフォーマルな教育、ということで、各界の色んな方々に講師に来てもらい、事業の評価・調査などの点でセミナーを行ったりして、これを報告書としてまとめ、外務省の補助金などをいただいて出版するということも続けている。

・メンバーについても資料に示した。NGO で JNNE の団体会員は現在 23 団体。教育の広い分野で、世界各地で各団体が活動している。幼児教育を専門に行っている団体は日本ではまだ数少ないが、様々な事業を行う中で、子どもへの教育・幼児教育の分野にも必然的に活動が広がっている団体が多くある。

◇幼い難民を考える会について

・成り立ちは、きっかけは 1980 年、カンボジアの難民キャンプのテントに幼児教育・子ども達の教育に関心を持っている女性達が集まり、ボランティアで難民キャンプに入り、そこでの子どもたちの様子を関係者に広く呼びかけ、これがマスコミなどに取り上げられ、1980 年の 2 月に「幼い難民を考える会」としてスタートした。

・当初からこれまで、一貫して幼児教育を専門として活動している。また、子どもたちの母親・女性たちの自立支援というのも、もう一つの柱としてある。

・目的は、そもそもは難民キャンプだったので、戦難や飢餓、貧困や飢餓などの様々な理由で、非常に貧しい環境におかれている子どもたちが、少しでも心も体も健全な成長をとげられるように、そして、その保護者たちが人間らしい生活環境の下に自立できるよう手助けすること。

・資料の 3 番目に、事業のこれまでの実績を述べた。難民キャンプで 13 年間保育センターを開いた後、キャンプが閉じ、カンボジアの人々が皆本国の方へ帰還、国の方へ戻った。この頃、タイで、カンボジアの国境に近い当時「被災村」と呼ばれたところで、タイの公立幼稚園に対して 10 年間、保育者の養成や遊具教材の提供ということで活動した。タ

イのほうでの事業は行政の方に、また、村の人たちに引き継いで 2000 年に終えた。現在はカンボジア一ヶ国で、1991 年からこれまで、幼児教育と女性の自立性という活動を続けている。

・カンボジア国のカンダール州他地方の 3 つの州で事業を行なっている。幼児教育に関しては、保育所の運営協力・保育者の研修・栄養改善を目的とした給食の支給・遊具や保育教材や絵本の現地での製作と普及・識字教材の開発と普及などを行なっている。

◇事業の効果検証と改善点

・幼児教育の事業を行なってきて、その評価が課題。教育の分野の評価を行なう・検証を行なのは、非常に難しい。昨年、またその一昨年に渡って、保育所の給食に関する栄養の調査、保育所の卒園児の追跡調査の 2 つの評価を行なった。

・卒園児の追跡調査では、91 年からこれまでの間に約 450 名くらいの子どもたちが巣立っていったが、それらの子どもたちが現在どうしているのか、学校に通っているのか・やめてしまったのか、どういう仕事をしているのか、今の時点で子ども自身や親が当時の保育所をどのように見ているかなどを調査した。

・その結果見えたことは、一つには、今でもカンボジアでは小学校で…その上もそうだが、中退や留年率が非常に高いということ。しかし一方で、都市である程度経済的に豊かになってきた人たちは、教育をお金を払ってでも受けさせたいと考えている親が多くなってきたということ。ただし農村の方へ行くと、カンボジアでは非常に貧富の差が激しくなってきており、貧困と言う事情から子どもが学校を辞めなくてはならなくなったり、親がまだ教育に関する理解が少なく「子どもは 2・3 年学校に行けばそれでいい、すぐに仕事を手伝って欲しい」、または「女性はやはり家で仕事を手伝って欲しい」というような意見もでてきた。

・評価の中で良い面としてあげられたのは、保育所の卒園児は 100%が少なくとも学校には通ったということ。入学して、ある年度は進学していったということが分かったが、これはカンボジアの政府の統計に比べても良い状態。幼児教育の後小学校教育に行く、という過程がある程度スムーズに動き出していることが見られた。

◇農村の 4 つの保育所の経済的自立

・NGO が海外で事業を行なう場合に、通常はほどんとが 100%外からの支援で始まるのが多いが、その中でいわゆるカウンターパートとして現地の政府や現地の NGO などがあって、そこに何年かを経て事業を移行していけるケースと、そういう相手方が無くその後なんとか現地の人達に引き継いでいくにはどうしたらよいか悩むケースの、2 通りがある。

・4 つの農村で開いている保育所は、当時 91 年に相手方のカウンターパートがいなかったため、100%こちら側の支援で始まった。これを、人の育成・施設の充実とともに、経済的に現地でどう自立させるか。非常に貧しい人たちの多い中、これが課題ではあるが、

試験的に今、いくつかの試みを始めながら試行錯誤している段階。

・二つの試みのうち、一つが、「小額の生活資金の貸付」。カンボジアでは生活費を貸付けるというのは非常に一般的だが、あらかじめ貸す対象としては保育所の保護者を対象にして、その利息を保育所の運営費として入れてもらう。もう一つは、保育料として（主に給食費に使う)、わずかな現金とお米を毎月親から集めていく。これを半年ごとに、お互いの了解を得ながら、少しずつ保育料を値上げしていく。

◇識字教育

・特にカンボジアでは、大きく言って約半数の人たちがまだ文字の読み書きが十分でないと言われている。文字を学ぶときに、幼い子どもたちが幼児期から文字に遊びながら親しみながら学んでいける教材を難民キャンプの時代から開発し改良し使い続けている。具体的にはクメール表(写真)を作成。カンボジアは子音と母音でできていて、これは子音の表であり、絵はこの子音が入った単語。カンボジアでは政府が小学校などで貼っているのは、まだ文字だけの表だが、絵を使って、少しでも親しみやすいものとした。難民キャンプで初版を作って、その後改良を重ねた。現地の政府や国際機関や NGO などを通して、広く子どもの関係の施設や小学校・女性のための識字教室などに配布し続けている。

・また、文字のカードも作った。全て現地でカンボジアの人たちと一緒に手作りで作る。今の表と文字あわせを、保育所で先生たちと一緒に遊んだり、トランプの神経衰弱の遊びをしたりして使う。

・最後にもう一つ、出来上がったばかりのものだが、今の文字の表を絵本にした。日本にもある、あいうえお絵本のようなもの。子どもの手のひらに入るサイズで、おそらく幼い子どもたちが初めて手にするであろう絵本ということで作った。

◇今後の課題

・地方から都市に仕事を求めて出てきた人たちが十分に仕事を得ることができず、路上生活をしたり、ごみを拾って生活をしたり、スラム街と言った形で貧しい人が住む地域ができている。そこでの子ども達の生活は非常に厳しく、エイズの感染も急増している。今年からこのスラム街で、現地の NGO に協力するという形で活動を開始した。

・最新の動きとして、カンボジアでも、いわゆるエデュケーション・オールという国家計画に沿って、幼児教育の分野でも政府の方がいよいよ動き出している。カンボジアでは今現在幼児教育を受けている子どもたちがわずか 8%。これは 91 年に CYR が活動を始めたときには 3.7%だったので、殆ど変化していない。建物の数だけで言えば、今幼児教育の施設は、全国で政府統計で 1800 以上あることになっているが、実際には建物がなかったり、小学校の一部を借りていたり、建物があっても崩れて使えない、というような施設も地方では多く見られる。なかなか、1800 以上という施設の数だけでははかれない。

・この状態を少しでも改善したいということで、政府の目標としては 2015 年までに 5 歳児の 75%が就学前教育を受けられるように、政府の幼児教育のアクションプラン作りが始まった。政府の方から、このアクションプラン作りの会議を始めたいので NGO からアドバイザーとして参加して欲しい、という要請があり、出席した。そこで、政府に予算がないため、多くのお金をかけるのではなく、資金のないところでも、幼児教育を一人でも多くの子どもが受けられるようにという話があった。特に地方の少数民族などが多い地域で、安価な資材で建物を建てる、あるいは、建物がなくても、お母さんたちのグループが保育に関心を持って活動を始めるというようなパイロットプロジェクトを、NGO の支援を受けながら行なっていきたいというような話が出ていた。

◇拠点システム事業に対して

・拠点システムの幼児教育の事業の中で、今回できた本当に大切なつながりというものを、是非これからも続けていきたい。
・私たちは、団体の中に幼児教育のいわゆる専門のスタッフやボランティアが多くおり、この活動がここまで続けてこられた。しかし、大学の関係者と、もっともう少し広い意味での幼児教育の専門の先生方や子どもの教育に関心を持っている方とのとのネットワークがまだまだ弱かった。今行なっているような、情報交換、学びあいというお互いを知り合うことから、是非これからも行って生きたい。

◇ハンドブックについて

・CYR でも難民キャンプの時に、英語版とカンボジア語版を作った。無籐先生のお話にあったが、国によって事情が非常に違うので、その国の状態に合った、そこで働く人たちの状態に合ったものにしていく必要がある。今回のハンドブックは非常によくまとまっているが、これを基礎にして、この後是非その国の状態に合ったものができてくると、本当に使いやすくなるだろう。特に現地の先生方や、政府の関係者の方、現地の政府の方々にも使えるものになっていくと思う。その場合、その国の言葉に翻訳していくという必要が出てくるだろう。
・私たちもハンドブックを作る際苦労したのは、こういう本を読みながら悩んだり考えたり、という経験が、内戦の時代が長くて学校に行っていないので、これで何をどう学ぶのかというところがなかなか分からないでいること。なるべく分かりやすい言葉で、易しい平易な言葉で、しかも具体的に書くということで数年も費やした。
・また、中に写真や図解があり、これがとっても有意義だと思う。遊具や教材を現地で手作りするため、このような形で紹介していただけたのは本当にありがたい。
・また、竹馬や段ボール箱の遊びなど日本で既に使っている遊びの道具や保育の教材で、現地でも「これならばできる」と「私たちでもこういうものなら使っているな」というようなものが写真や説明で出てくると、もっと親しみがわいてくるだろう。普通はやは

り冒頭のこの写真のように、きれいな園が出てきてしまうと、この環境だけに目を奪われてしまって、とうてい国が違うから難しいという風に考えてしまう場合もとても多い。これはこれでいいと思うが、中で具体的にお互いに共感を感じられるようなものが入ってくるとありがたい。

・作り方や素材をどう使うかということと同時に、そこにこめられたメッセージというか、成長の段階、この教材や今伝えようとしていることにどういう目的や理念があるのか、ということを伝えていくことが、今現場では非常に機会が限られているため、そのあたりを、日本の先生方の経験から分かりやすく具体的に伝えていただけるようなハンドブックを作ると、本当に役立つものになるだろう。